多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性
―第５回日韓大学生国際交流セミナーを通して―

西岡　麻衣子

はじめに

現在のグローバル時代において、私達は多様な文化背景を持つ人々と関わり、お互いを理解し、ともに生きていく能力が求められている。世界の多くの国は多文化・多言語・多民族の環境が日常的に存在し、多様な文化に慣れ親しみ、理解する能力が比較的育成されやすい環境であったといえる。しかし日本と韓国はその地理的環境などから、多文化とは言い難い限られた文化環境で長い時間を過ごし、グローバル時代に求められる様々な文化を理解する能力を身につけることに立ち遅れてしまった感がある。つまり国際共生社会に対応していくためには、そのような力を習得することは両国の若者に共通する重要課題であり、その第一歩として東アジア共生社会を想定するなら、まずアジアの中での多文化理解を目指すことが求められるだろう。このような背景から日韓大学生国際交流セミナーは「文化リテラシー（文化を読み解く能力）の育成」を目的に、日本のお茶の水女子大学と韓国の同徳女子大学校において開催され、今年で５回目を迎えた。今回筆者は、2008年８月５日から８月12日まで韓国のソウルで開催された「第５回日韓大学生国際交流セミナー（以下交流セミナー）」にアシスタントとして参加し、両国の学生（中国の留学生含む）が直接出会い交流しながら、体験に基づく協働研究と研究生活の中で、どのような学びや気づきがあり、どのように文化理解を深めていったのかについて、お茶の水女子大学との共同調査から分析・考察を行い、交流セミナーを通した体験型交流学習[1]の有効性と問題点を探った。

１．多文化理解と体験型交流学習

1-1　先行研究による多文化理解態度と能力

一言で多文化といっても、マクロ的な国、民族レベルの多文化、家庭環境に性格などが加わったミクロ的な個人レベルの多文化、また性別や年代など普遍的属性レベルの多文化と様々であり、そのマクロ・ミクロの文化が相互に影響を及ぼし合い、一人の人間の自文化を作り出していると言える。つまり交流セミナーは「己が属する大小様々な集団の文化の影響を受けた個人と個人の多文化の出会いの場」と定義できる。ではそのような多様な文化背景を持つ人々に出会い、理解するには具体的にどのような態度や能力が必要となるのだろうか。

加賀美（2006）は多文化を理解する態度を「多文化社会において異なる文化的背景を持つ人々同士がともに活動を行う際に相互に理解し合い、良好な人間関係を作ろうとする態度」と定義し、異文化間能力、異文化理解態度などの先行研究をもとに多文化理解態度尺度（Multicultural Understanding Scalle; MUS）を構築している。それによる多文化理解態度の要因は①多様性尊重②複眼性③相手文化尊重④自文化尊重⑤状況判断⑥曖昧性の忍耐⑦柔軟性⑧調整⑨創造性⑩協働性⑪積極的傾聴⑫共感性⑬言語学習重視⑭対等性⑮公正観⑯忍耐⑰寛容性の17項目である。また石井ら（1997）は異文化コミュニケーション能力を主に「態度（情緒・認知）」「行動」「技能」「性格とその他」の４項目に分け、その構成要素を以下のようにまとめている。（表１）

表１　石井らによる異文化コミュニケーション能力構成要素（石井他、1997より筆者作成）

態　度		行　動	技　能	性　格 その他
情　緒	認　知			
①感情移入 ②非民族中心的態度 ③非偏見的態度	①個人的・文化的 アイデンティティ保持 ②個の多様性を知る ③自他文化及び他者の客観的な査定 ④肯定的かつ現実的な期待 ⑤専門的知識	①対人関係樹立 ②相互作用 ③尊敬表示 ④判断保留・描写的判断 ⑤利他的行動 ⑥自発性 ⑦道徳	①仕事遂行 ②言語・非言語操作 ③機略縦横	①忍耐 ②寛容 ③開放性 ④粘り強さ ⑤率直さ ⑥自律性 ⑦沈着など
				①高い動機 ②知的好奇心

他にも「カルチャラル・アウェアネス（①自文化への理解②非民族中心主義③外国文化への興味)」、「自己調整力（①寛容性、②柔軟性、③オープンネス)」、「状況調整力（①コミュニケーション②対人関係マネージメント③判断力④知的能力)」の３つの機能を重視した山岸（1992）の「異文化対処力」（宮本・松岡2000 ）などが参考になり、いずれも分類の視点は異なるが、要素としては類似したものとなっている。

1-2　体験型交流学習とその効果

体験型交流学習は、上述のような多文化理解に求められる様々な態度や能力を総合的に学べる学習方法として有効性が期待される。しかし体験といってもただ単に体験するだけでは意味がなく、その体験を通じて自らの気づきを概念化することが体験学習理論の中心となる。体験学習が前提としている考え方は、Gudykunst and Nishida（1981）により以下の３点にまとめられている。(安場他 1998)（１）人間は学習過程に個人的に関わっているときに最も効率よく学習することができる（２）もしもその知識がその本人にとって何らかの意味を持ち、本人に何らかの影響を与えるべきものであるなら、それはその本人によって発見されなければならない（３）その本人が自分自身の学習目標を設定する自由を持つとき、学習への係わり合いの度合いは最も高くなる。つまり多文化の中で体験学習を行うことは、その文化の日常生活の実体験を自分なりに法則化し、それを検証する過程からより適応した行動を学習していくことであり、その基本概念は図１のようなサイクルで表される。さらに津村ら（2005）は体験学習に臨む学習者の態度として①主体性②現実（リアル）性③協働性④創造性⑤試行性の５つをあげている。

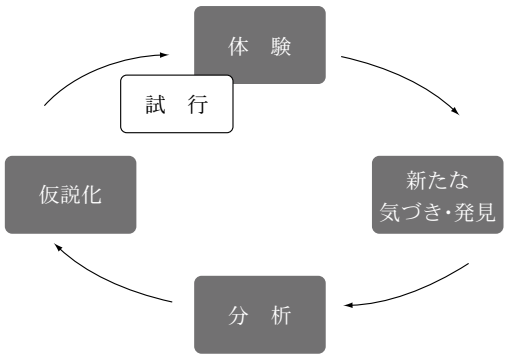


図１　体験学習の循環過程（津村他，2005より引用 一部改変）

また体験型交流学習は、体験を分かち合い相互作用しながら学ぶということで、交流学習であり、交流学習の期待される最大の要素は自己概念拡大による「共感的理解」の促進である。理解には「評価的理解」「分析的理解」「同情的理解」「共感的理解」の４つがあるが、中でも真の理解には「共感的理解」が欠かせないとされている。(星野2002) 共感的理解を促すためには、自分の概念を把握しそれを広げることが必要になり、そのためには「新しい出会い」と「経験」の積み重ねが求められる。交流によって様々な異なる文化背景を持つ人々に出会い経験することで、まず自己を顧み他者を知る機会となり、自己概念を広げ共感的理解へと導かれる。これは多文化を理解する態度や能力の基礎となり、他の態度や能力へ波及効果を及ぼすことが予想される。

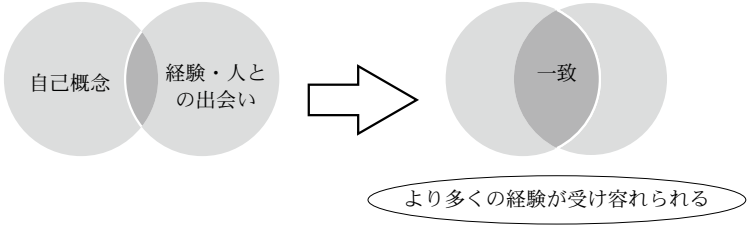


図２　自己概念の拡大による共感的理解（星野，2002より引用　改変）

しかし、交流は必ずしもよい結果を生むとは限らない。ステファン（1985）は交流の条件を〈メンバーに関する条件〉〈交流の仕方に関しての条件〉〈環境に関しての条件〉に分け13項目の条件をあげており（八代他　1998）、交流には周到な準備と注意が必要になる。

2．日韓大学生国際交流セミナーの歴史と現状

日韓大学生国際交流セミナーは、「日韓の学生がお互いの文化を理解し、親睦・交流を促進すること」を目的に、お茶の水女子大学国際教育センターと同徳女子大学校人文科学大学日本語科の主催により2004年から開催されている。2007年にお茶の水女子大学側にグローバル文化学環が加わり、その目的もグローバル時代に求められる「文化リテラシーの育成」が第一に掲げられ、国際社会に対応できる人材育成の場として、両大学の共通教育理念のもと積極的に推進されている。第１回（2004）、第３回（2006）、そして今年の第５回は韓国で、第２回（2005）、第４回（2007）は日本で約１週間前後に渡り開催され、両国の学生（留学生含む）が毎年交互にお互いの国を訪問し、迎える形となっている。回を重ねるごとに交流セミナーは少しづつ様相を変え、今年は両大学の先生方の熱意により、「研究発表型」セミナーから「体験型」セミナーへと大きな転換期を迎えた。その狙いは「教室で両国の文化を知識として学ぶのではなく、体験に基づく協働研究（フィールドワーク）と共同生活（ホームステイ、合宿）の中で、人間関係やコミュニケーション、生活習慣に関わる様々な文化の異同に気づき、それを対話の中でいかに理解していくかといった点を重視したためである」（森山2009刊行予定）とされ、その移行は2006年に韓国で行われた第３回交流セミナーの全体日程との比較からも読み取ることができる。

表２　「研究発表型」から「体験型」へ

	第３回（2006年）	第５回（2008年）	
１日目	13：30　日本側　韓国到着 14：30　同徳女子大学到着 17：30　時事日本語学院授業見学、夕食会	17：10　日本側　韓国到着 19：00　歓迎夕食会（仁寺洞）	日本側 ホテル宿泊
２日目	９：30　開講式・オリエンテーション 10：00　研究発表テーマ1「子供」2「食」 12：00　昼食 13：00　グループ別ミーティング 13：30　研究発表３「結婚」４「美意識」 15：30　研究発表５「ミュージカル」 ６「江戸・朝鮮時代の女性」 18：00　全体歓迎会	９：00　開会式 ９：30　韓日文化体験学習 ・日韓民族衣装試着 ・サムルノリ体験 12：00　全体歓迎会 午後　グループ別野外実習 「食文化」「伝統建築物」「外国語教育」 「ファッション」「美意識」「軍隊生活」	ホームステイ
３日目	グループ別野外実習	グループ別野外実習	ホームステイ
４日目	午前　　報告会準備 14：00　野外実習報告会 17：00　総評	午前　　グループ別野外実習 14：00　報告会準備 15：00　発表及び討論 17：00　総評	ホームステイ
５日目	10：00　大学集合後、民俗村へ 11：30　民俗村観光 18：00　全体送別会	８：00　大学集合後、雪嶽山へ 13：00　雪嶽山国立公園 16：00　洛山ビーチ 18：00　お別れ会　　研修院で宿泊	(2006) ホームステイ
６日目	自由時間	９：00　朝食後、江綾船橋荘を見学 13：00　昼食後、五台山月精寺を見学 17：00　大学到着	ホームステイ
７日目	10：30　大学集合見送り 日本側帰途へ	自由時間 (時事日本語学院見学)	ホームステイ
8日目		10：00　鐘路集合見送り 日本側帰途へ	

（森山2006/申2008 より引用 改変）

まず、今回の交流セミナーは第３回の交流セミナーに比べ、グループ野外実習を３日に渡って設け、その時間を大幅に増やし、学生達が自ら設定したテーマの活動内容を十分に体験し仮説検証できるものとなっている（表３）。そのため、来韓後すぐに実習が行えるよう、セミナー前からメールなどで活発に連絡を取り合い、意見交換し、事前準備を進めていた。直接交流の伏線としても、このような間接交流が学生たちの出会いへの期待を高めたことはいうまでもない。また、初日の文化体験プログラムや後半に設けられたソラク山合宿など、グループでの活動という限られたメンバーとの密接な交流に加え、全体交流の場もプログラムの中に数多く組み込まれるなど、より体験型交流学習が取り入れられたスケジュールとなっている。

表３　グループＢ「日韓外国語教育実態　比較」野外実習スケジュール

１日目	２日目	３日目
	８：00　大学SWELL 授業聴講 12：00　昼食および 午後の予定確認	９：00　日本語学院で授業見学 11：00　意見交換 12：00　昼食
13：00　市の英語キャンプに到着 担当者へインタビュー 14：00　英語キャンプ授業見学 17：00　夕食および意見交換 19：00　明日の予定確認解散	14：00　英語村へ到着 KIDプログラムへ参加 15：00　英語村・公演会観覧 17：00　夕食および意見交換 19：00　明日の予定確認解散	14：00　報告会準備 15：00　発表および討論 17：00　総評

※グループＢ（お茶大側学生３名、同徳女子大側学生５名）が作成したものを引用改訂

３．調査目的と研究課題

以上の背景により小論では、交流セミナーが学習者にどのような気づきや変化をもたらし、多文化理解の態度や能力を促したか（また促さなかったのか）を探り、体験型交流学習の有効性と問題点を検証することを目的とし、今後の方向性の示唆を得ることを課題とする。

４．調査方法

4-1　調査対象者

調査対象者は第５回日韓大学生国際交流セミナー参加者54名で、同徳女子大学校からは日本語科32名、メディアデザイン科１名、英語科１名の計34名[2]。お茶の水女子大学からは多文化交流実習Ⅲ，Ⅳ受講者の文教育学部17名（中国国籍の留学生１名含む）、理学部１名、生活科学部２名の計20名である。

4-2　手続き

交流セミナー参加者が全プログラムを通じて、総合的に変容があったのかその有無を検証するため、お茶の水女子大学側の調査チームが作成した国際交流による文化学習調査のための選択式質問紙（以下、便宜的に「国際交流による文化学習調査表」）を使用した(セミナー前後に実施)。さらに、参加者個々人にどのような気づきや変化があったのかを自由記述の内容分析で調査した。内容分析はセミナー後の記述式感想文(質問項目は過去の交流セミナーの感想文を参考に筆者が修正を加えたものを使用）を中心に行い、また内容分析の解釈の補助を得るために、筆者のアシスタントとしての観察記録と非公式のインタビューの記録を参考にした。

５．調査の分析と結果

5-1　国際交流による文化学習調査の分析と結果

国際交流による文化学習調査表（お茶の水女子大学調査チーム　小林作成）は「韓国文化/日本文化について」「文化をテーマにした国際交流セミナーについて」「日本社会・韓国社会のイメージについて」に関する計35の質問項目に５段階評定で選択するものである。韓国側には日本語能力と文化学習の関係についての「文化を学ぶ活動について」が加えられ、計45項目となっている。(質問項目の詳細は注３を参照）日本側は不備があった５名を除く15名、韓国側は不備のあった５名を除く29名を分析対象とし、ｔ検定（対応のある平均の差の検定）を行った結果、日本側、韓国側ともセミナー前後の平均得点に有意な差が認められ、交流セミナーの有効性が確認された。(日本側（$t=-4.69$, $p<.01$, 自由度＝14）韓国側（$t=-2.26$, $p<.01$, 自由度＝28))

表４　セミナー前後における選択式調査表に対する回答総数の平均値

	日本側平均　N=15	t 値	韓国側平均　N=29	t 値
セミナー前	118.9	t=－4.69**	166.0	t=－2.26**
セミナー後	125.7		170.0	

＊＊　p＜.01

5-2　自由記述の内容分析と結果

日本側19名、韓国側32名が提出した感想文形式の自由記述から、多文化理解に関連のある気づきや変化についてのコメントを取り出し、内容的に整合性のあるものをまとめ、さらにそれらを「情緒」「認知」「行動」に３分類[4]した。分析項目は「セミナーの活動に関して（①文化体験プログラム②グループ実習③討論・発表会④ホームステイ⑤ソラク山合宿⑥その他の自由時間で学んだこと・感じたことについて)」と「セミナー全体に関して（有益だったこと、有益でなかったこと)」である。宮本・松岡（2000）にあるよう、情緒は「心」の部分に関する記述、認知は「頭」としての認識の記述であり、ここでは行動に技能も含め、自己のコミュニケーション行動を調整し、具現化させるためのストラテジーに関する記述として分類した。

表５　セミナーの活動と全体に関しての感想から得られた多文化理解に関する主な気づきや変化

	日　本　側	韓　国　側
情　緒	・楽しさ、優しさ、温かさ、思いやりを感じる ・信頼感・不安感の軽減 ・心を開く・紐帯感・共感する・	・親しみや友情を感じる・偏見の除去 ・紐帯感・楽しさを感じる・心を開く ・共感する・尊敬心を持つ・自信を持つ
認　知	・両国文化の共通点と相違点の認識 ・相手文化を知る、認識する、理解する ・自己を顧みる　・共通性を認識する	・自文化への気づき・相手文化の理解 ・両国文化の共通点と相違点の認識 ・知識の必要性　・共通性を認識する
行　動	・友人関係構築・韓国語を操る・傾聴 ・非言語の重要性を知る・コンフリクトの重要性を知る・理解しようする意志を持つ・自分の意見を主張する	・友人関係構築・日本語を操る ・積極的、自発的行動・合意点を探る ・意見を明確に伝える・多様な視線を持つ ・多くの人との考えの交換、共有

情緒面において、日本側の学生は「韓国人学生の優しさ、温かさを感じた」という記述が多く、今回が初めての渡韓や外国人と衣食住を共にする参加者が多い中、触れ合いの温かさを感じ、異文化との接触に勇気を得たことがうかがえる。他にも「皆で力を合わせて行動したことで、信頼が増した。」（信頼感）や「最初は不安だったが、体験だからこそすぐに文化の壁を感じることなく、お互いに打ち解けることができた。」（不安感の軽減）など、セミナー前に感じていた異文化に対する不安が活動を通して解消され、親交が深まった記述なども見られた。一方、韓国側も「一緒に長い時間を過ごし、苦労し、経験しながら親しみを覚え、情も生まれた。」など親しくなれた喜びや、友情を感じたという記述が多く、「日本人は情がないという偏見があったがその偏見をなくす機会になった。」（偏見の除去）などセミナーへの参加がステレオタイプを崩すきっかけとなり、国を超えた個人個人の心情のやり取りが成されたことが推察できるものとなっている。

認知面においては、日本側は「韓国の文化を知る、認識する、理解する」の記述が多く、「韓国における上下関係のありかたの認識」や「迷惑をかけあう文化（それを絆と感じる文化）を身をもって体験できた。」などがあったほか、発表・討論を通し、「自分達がどれほど無関心であったかに気がつけた。」など、自己を顧みる機会となったことも示されている。韓国側に至っては、自己を含む「自文化への気づき」が一層強くみられ、日本人学生と行動を共にするなかで、韓国事情・文化をわかりやすく説明するにはどのようにしたらいいかを模索しながら、自文化を顧み、理解を深めることの重要性や新しい側面の発見など全体的な気づきへと発展した様子がうかがえた。また発表・討論においては「日韓の差を改めて認識した。」という記述が多くみられた。

行動面においては日本側の特徴として、ホームステイを通して「言葉がほとんど通じなくても、熱心に

相手の話に耳を傾けたり、相手の誠意に誠意で答えれば気持は通じることができる。」や「ジェスチャーが予想以上に通じて驚いた。」など韓国語能力の必要性を感じながらも、言葉が通じない環境ならではの「傾聴」や「非言語の重要性の気づき」を言及する記述が見られた。反面、韓国側は日本語科の学生が多いだけあり、「日本語能力の重要性」を言及したものが多く、深い理解のためには言語操作は欠かせないとして、今後の日本語学習への強い動機づけになっている。他にも「積極的に近づこうとしなければ外国人と親しくなれない。」など積極的行動の重要性を示唆する記述がみられた。下の図は主な活動プログラムでの気づきを含めた感想を上位順に示したものである。

表6 主な活動プログラムでの気づきを含めた感想（上位順）※数字は言及した学生数と割合を示す

グループ実習		発表・討論		ホームステイ	
日本（19人）	韓国（31人）	日本（19人）	韓国（31人）	日本（19人）	韓国（18人）
〈よかった点〉 ①親しみや友情を感じる6（32%） ①文化の直接体験 6（32%） ③深く話し合える 3（16%） ③観光では行けない所への訪問 3（16%） ⑤両国文化の共通点と差異点の認識 1（5%） ⑤自己の気づき 1（5%） ⑤不安感の軽減 1（5%） 〈大変だった点〉 ①天候・移動などの環境面 6（32%） ②言葉やコミュニケーションの壁 4（21%） ③急な予定変更 3（16% ④内容検討不足 2（11%） ⑤日韓の考え方の差 1（5%） ⑤意見の主張 1（5%） ⑤テーマと向き合う 1（5%）	〈よかった点〉 ①自文化への気づき 10（32%） ②両国文化の理解 8（26%） ③親しみや友情を感じる7（23%） ③深く話し合える 7（23%） ⑤体験の共有 5（16%） ⑥知識や考えの共有 1（3%） ⑦日本語力向上 1（3%） 〈大変だった点〉 ①天候や移動などの環境面 18（58%） ②日本語能力の不足 6（19%） ③内容検討不足 5（16%） ④私生活に影響 4（13%） ⑤テーマと向き合う 1（3%） ⑤見学先との交渉 1（3%）	①発表前のグループ討論やまとめ時間の必要性 6（32%） ②発表能力・伝え方の必要性 5（26%） ③深い研究の必要性 3（16%） ④自己への気づき 2（11%） ④意見調整の難しさ 2（11%） ⑥歴史的問題を扱う難しさ1（5%） ⑥各意見をまとめられた 1（5%）	①両国文化の差の認識 10（31%） ②日本語能力の必要性 8（25%） ③発表前のグループ討論やまとめ時間の必要性 6（19%） ④深い研究と専門的知識の必要性 5（16%） ⑤発表能力の必要性 4（13%） ⑥日本人学生の発表能力への感心 3（10%） ⑦グループ間の紐帯感 2（6%） ⑧合意点を探る 1（3%） ⑧両国の溝を実感 1（3%）	①温かさを感じる 8（42%） ②韓国文化の理解 6（32%） ③韓国語の必要性 5（26%） ④非言語の必要性 4（21%） ⑤傾聴の大切さ 1（5%）	①日本文化の理解 9（50%） ②親しみや友情を感じる5（28%） ③偏見の消失 4（22%） ④ステレオタイプの形成 1（5%） ④韓国文化の紹介 1（5%）
				ソラク合宿	
				日本（19人）	韓国（22人）
				①より親しみや友情を感じる 7（37%） ②遠くて移動が大変 4（21%） ③韓国文化の理解 2（11%） ③共通性の認識 2（11%） ⑤信頼の増加 1（5%） ⑥コンフリクトの重要性 1（5%） ⑦コミュニケショーンの難しさ 1（5%）	①より親しみや友情を感じる 11（50%） ②日程が厳しい 6（30%） ③自文化へ気づき 5（23%） ④見学時間が短い 3（14%） ⑤韓日の共通点と差異点の認識 2（9%） ⑤日本人学生の準備能力に感心 2（9%）

また「セミナーによる自分の文化/相手の文化に対する考え方の変化」の質問項目に対し、日本側は自分の文化に対して19名中12名（63%）が、相手の文化に対しては19名中18名が「変わった」に回答しており（1名未選択）、100％近い確率で変化が起きたとしている。訪問した日本人学生にとっては、毎日が新しい経験であり出会いであったため、変化も顕著に表れたと思われる。一方、迎える韓国側は自分の文化に対して

は32名中20名（62%）が、相手の文化に対して32名中19名（59%）が「変わった」と回答し、どちらも同程度の変化結果となっている。

日本側の自文化に対する変化の中で一番多かったものは「自文化の客観的理解」（6名）で、「普通・いい国・漠然としたイメージ、韓国とそう変わらない」から「細かい・清潔・豊か・ぜいたく・個人の空間を尊重する・内向的な印象・対立の際（中略）何でもごまかす・時間を正確に守る規則の整った社会」などの記述がみられた。他にも「想像以上に自分の文化を知らなかったことに気づいた。」など他文化と接することで自文化を顧みる記述がみられた。一方、相手文化に対する変化は「韓国文化の客観的認識」（9名）、「韓国文化へのプラスの変化」（3名）、「両国の差の認識」（2名）、「韓国内での多様性の認識」（2名）「共通点の認識」（1名）の順となっており、中でも「言いたいことをはっきり言う人が多いから少し苦手だったが、むしろそこに良さを感じた。」など、直接の触れ合いを通して、相手の文化を認め、理解し、受け入れるようになった過程がうかがえる。

韓国側の自文化に対する変化の中で一番多かったものは「自文化へのプラスの変化」（9名）で、「外国に紹介するものは特にないと思っていたが、素晴らしい伝統文化や建築物をあることに気づいた。」など、「誇らしい」や「自負心」を感じるという記述も見られた。他には「自文化の客観的認識」（7名）に関する記述が多く、「軍隊生活」をテーマにした学生からは「平和と軍隊の関係、分断国家の現実について改めて考えるようになった。」などがあった。一方、相手文化に対する変化の中では「日本文化へのプラスの変化」(10名）が一番多く、「類似点の気づき」（3名）「多様性の気づき」（2名）「日本文化へのマイナスの変化」（1名）の順となっている。プラスの変化では「近寄り難く、個人主義で、親しくなれない」という考えから「温かく、深く交際できる」などへの変化がみられ、多様性の気づきでは「日本文化は（中略）何か壁があると思ったけど、どんな国の人かより個人個人の特性があり、心を開けばそのようなこと（国籍）は重要でないと思った。」など共同生活を通して、個人の付き合いが成されているのがわかる。しかし、「日本人は親切だと思ったが、距離を置くことがわかった。」とマイナスに変化した記述もみられ、セミナーで出会った日本人、特にグループのメンバーや、ホームステイの相手との関係が今後の日本人観に大きく影響を与えてしまう危険性も見られた。

以上、ここでは特に認知面において多くの気づきがみられる結果となった。もちろん「変化しなかった」[5]と回答する学生もいたが、上述のセミナーの活動での気づきの分析結果などと合わせると総合的に、情緒面、認知面、行動面において多文化理解を促す様々な気づきや変化が確認され、体験型交流学習の意義が認められたということができるだろう。このような多文化理解態度や能力の形成は文化リテラシー、文化背景や文化の深層を掘り下げていく力（文化差異の気づき→各文化独自のコミュニケーションスタイルの理解→社会システムの解明→環境的・地理的影響の認識）の形成へと繋がることが期待され、体験型学習の可能性が十分に見出されたと言える。しかし、先のマイナスの変化の記述や他の項目の自由記述などから、少数ではあるが日本側からは「時間にルーズ、計画性がないので、予定通りに進まない。」などや、韓国側からは「やはり日本人と親しくなるには時間がかかる。」「日本人と会うたびに本当の胸の内を知りたいという思いを消すことができない。」など、逆にステレオタイプを強めてしまったり、個人から受けた印象を一般化してしまう記述も見られ、体験型交流学習だからこその危険性やマイナス面が現れてしまったことも否定できない。そのようなマイナス面の原因も含め、次に考察を試みる。

6．考察

6-1　先行研究の多文化理解との対照から考える

多文化理解態度や能力に関する先行研究については2-1で述べたが、自由記述の内容分析から抽出された各要素（表5）は先述の石井ら（表1）の示すものと重なる部分が多い。石井らの示す〈情緒①感情移入〉はここでは「共感する」や「紐帯感」など、〈情緒②非民族中心的態度〉は「尊敬心を持つ」、〈情緒③非偏見的態度〉は「偏見の除去」などと共通する。同様に認知・行動・技能面においても共通のものが多々見られ、加賀美（2006）の多文化理解態度や山岸（1997）の異文化対処力おいても共通する部分があるなど、先行研究からも今回のセミナーが様々な気づきや変化をもたらし、多文化を理解するための態度や能力の形成に効果があったことが支持される。しかし、グループ実習や発表・討論における感想や気づきから、メールでの事前準備のやり取りや・意見調整の難しさ、発表の不満足さなどがあげられていることから、石井らの〈技能①仕事遂行〉能力は今後の課題であると思われる。多文化環境や異文化圏の人と、何かを成し遂げようとした場合、自文化環境や同文化圏の人との時と同じように、自己の持つ本来の能力を発揮することは非

常に難しい。さらに卓越した予測能力と、それを支える柔軟性、寛容性を身につけることが求められると言える。

6-2　日韓比較から考える

自由記述や観察からの分析結果からみられる最も大きな相違点は、お互いの文化理解に関して韓国側が体験による理論の構築（知識の再構築）を目指している段階であるのに対し、日本側はまさに今回の体験から多くの気づきを得て、これらから解釈に入ろうとしているように見えた。つまり、体験学習のサイクルの過程において、韓国側が一歩リードしているようであった。（表６の「発表・討論」での気づきや感想の日韓比較を見ても、差を認識し自分なりに新たな理論構築を目指した韓国と、体験した事に対する振り返りや共有の時間を切に希望した日本の様子が見て取れる。）これは韓国側のほとんどが日本語と日本文化を専門に学んでいる日本語科の学生であり、日本人や日本文化に触れることが今回初めてではなかったのに対し、日本側は準備として韓国語や韓国文化を学んだ学生たちが多く直接体験するのは初めてという点を考慮すれば当然のことであろう。しかしだからといって、韓国側が文化差の様々な要因までを体系的に理解していたかというとそうではなかったし、日本側においては知識がないからこその気づき（非言語の大切さや、非先入観的態度）がもたらされたという長点もあった。今後も、継続した体験型交流学習は両国の共通の課題である。また、訪問する側と迎える側では求められる多文化理解能力も異なるため、教師やTAは体験学習のサイクルが円滑に循環するよう、以上のような両国学生の異なる面も十分に考慮したサポートの仕方が必要なのではないかと思われる。

6-3　マイナスの要因を考える

今回のセミナーにおけるマイナスの記述の要因は、不適切な期待感と交流の条件の問題が指摘できる。石井ら（1997）は異文化コミュニケーション能力の認知面の要素として「肯定的かつ現実的な期待」をあげているが、マイナスの感想を書いた学生に筆者は交流や日本人に対する多大な期待があったのではないかと推測している。初日の顔合わせの時に、人一倍張り切っていた彼女が最後には「やはり日本人と親しくなるのには時間がかかる」と残している背景には非現実的な期待感の裏切りによる、否定的な反応があったのではないだろうか。八代（1998）は異文化や対人関係における期待と態度の関係の認識の重要性を説いており、このような異文化トレーニングも体験型交流学習のマイナス面を回避する手段になると思われる。

また、韓国側から「日本側の学生たちが少しでも韓国に関心があったら、もっとお互い楽しめたのではないかと思う。私たちに「お任せします」という感じで。どこに行けばいいんだろうと少し困ってしまった。」という記述、（反対に「日本の学生が韓国の文化を積極的に知ろうとしてくれて有難かった。」との記述もあり。）の背景には、交流の条件の問題点が考えられる。ステファンは交流の仕方に関する条件の一つとして「接触は参加者が自発的に行うこと」、メンバーに関する条件の一つとして「できるだけ考え方の似ている人同士の交流であること」をあげている（八代1998）。多文化理解の視点からすると考え方の相違は認められるべきであるが、少なくともこの場面においての「お互いに対する関心度」にあまり差があってはうまくいかないだろう。

このような条件を考慮した継続した交流と様々な状況下での様々なグループの交流が望まれる。

７．今後の課題

以上、体験型交流学習の今後の方向付けを行うためには、以下の３つの課題が考えられる。

①　交流の環境の整備

先のマイナス面の考察において、交流の条件の問題点を指摘したように、交流の環境を整備することが望まれる。「関心度」の他にもグループの人数の比率を指摘する声もあり、可能な限り同人数での交流の場の設定や、毎回グループの構成を変えるなど様々なメンバーとの交流が望まれる。また、円滑な事前準備やセミナー後の継続した交流のために、ホームページの作成によるネット上の間接交流の場の設定など全体的な交流の環境の整備が必要となる。

②　振り返りの効果的な設定

体験学習のサイクルで最も大切なのは振り返りである。体験と理論の結合のためには、気づきの十分な考察による課題の明確化が必要であり、それには効果的かつ十分な振り返りが不可欠となる。今回のセミナーは体験そのものを重視した点で非常に意義のあるものだったが、その体験による気づきの共有や解釈が十分でなかった点が惜しまれる。（先述のように、表６の「発表・討論」において両国から「発表前のグループ討論とまとめ時間の必要性」があげられており、気づきを深めたかったという学生の思いが読み取れる。）実習モニターシートや学習ジャーナルを導入し、毎回の実習ごとに振り返りの時間を設けるなど、学習者にその重要性をいかに意識させるかも含め、今後振り返りを十分に考慮した体験型交流学習が望まれる。

③　教師とTAの関わり方

体験型交流学習において教師やTAの役割は、学習者が主体的に学べるプログラムや適切な環境づくりを行うことに重点が置かれる。つまり、基本的に黒子のようにファシリテーターとして援助者に徹するわけだが、適切な時期に、適切な学習リソースやスキャフォールディングの提供が必要となる。その際、各学習者やグループによって、それぞれ必要な支援が異なってくるため、その関わり具合の見極めや、臨機応変な対応が求められることとなる。そのような状況に対応するために、教師やTAはファシリテーターとしての知識やスキル、自律学習の考え、また異文化トレーニングに精通していることが望ましいだろう。そして何より、教師やTA自身が多文化を理解する態度や能力を有し、多文化的視点を持った個人として学習者に関わり、共に成長しようとする姿勢で臨まなければならないと言える。

以上の点を主な課題とし、多文化理解を目指した体験型交流学習について、今後さらなる考察を試みていきたいと思う。なお今回は多文化理解の要素を抽出するに留まり、各自がそれぞれの要素において、どの程度の幅を持って形成されたのについての検証や、詳しい変容過程の考察は行えなかった。今後、多文化理解尺度の作成を試みたり、インタビュー調査などを行い、多角的かつ複眼的な観点からより考察を深めていきたいと思う。

〈注〉

1．交流学習には様々な類型があるため、ここでは交流学習の一つとして体験型交流学習としている。

2．34名のうち全てのプログラム（事前準備、文化体験、グループ実習、発表・報告会、ホームステイ、ソラク合宿）への参加者は13名、事前準備を除く全プログラム参加者は2名、ホームステイを除く全プログラム参加者は9名、ソラク合宿を除く全プログラム参加者は3名、ホームステイとソラク合宿を除くプログラム参加者は5名、事前準備・文化体験・グループ実習のみの参加者1名、ホームステイと発表・討論のみの参加者1名となっている。

3．①韓国/日本文化について（1．韓国/日本に興味がある 2．韓国/日本文化が好きだ 3．韓国/日本文化に関する新しい知識を得たい。4．韓国/日本文化についてもっと体験してみたい 5．日常的に韓国/日本文化と触れる機会がある 6．韓国/日本文化を理解するのは難しい 7．韓国/日本文化と日本/韓国文化は似ていると思う 8．韓国/日本文化といっても個人個人の持つ文化はそれぞれ違う）

②文化をテーマにして国際交流セミナーについて（1．私はこの交流セミナーの中で日本/韓国文化を他の学生にわかりやすく伝えることができる 2．韓国人/日本人学生と日韓の文化を学ぶことで、日本文化/韓国文化についての新たな知識を得ることができる 3．韓国人/日本人学生と日韓の文化を学ぶことで日本/韓国文化を違った角度で見ることができる 4．この交流セミナーによって、積極的に他の学生と話す自信がつく 5．普段の授業よりも、この交流セミナーの方が積極的に授業に参加すると思う 6．このような交流セミナーはお互いの文化を学ぶのに有効だと思う 7．このような交流セミナーをもっと多く経験したいと思う）

③日本社会・韓国社会のイメージ（1．日本社会は先進的だ 2．日本社会は規則を厳格に適用する 3．日本社会は集団の結束力が強い。4．日本社会は親しみやすい 5．日本社会は自由だ 6．日本社会はおだやかだ 7．日本社会は理解しやすい 8．日本社会はあたたかい 9．日本社会は男女平等だ10. 日本社会は変化しやすい。※以下「日本社会」を「韓国社会」に変えて同一質問10項目）

④文化を学ぶ活動について（1．日本語学習と文化を学ぶ活動は両方重要だ 2．この日韓の文化を学ぶセミナーを通して、日本語の資料を読むことに慣れると思う。3．セミナーを通して、言いたいことを日本語で表現する能力が向上する 4．セミナーを通して自分の生活に役立つ日本語の表現を知ることができる 5．セミナーを通して日本語を話すのに自信がつく 6．セミナーによって発現する人の日本語を聞きとる能力が向上する 7．セミナーによって日本語を書く能力が向上する 8．セミナーによって自分の勉強に役立つ語彙を学ぶことができる 9．普段の日本語の授業よりも積極的に参加し日本語を使うと思う10日韓の文化を通して日本語学ぶセミナーに積極的に参加したい）

4．「コミュニケーション能力は、認知、情意、行動の3つの側面に分けられる」との見解が、現在研究者間で一致したものであるという指摘（小山・川島2001）や、異文化トレーニングにおいてもこの3つの側面からアプローチすることが一般的であることを受け、3分類を試みている。

5．「変化しなかった」と回答した学生の理由記述は、日本側は自分の文化に対し「日本の文化より韓国の文化に目を向けていた。」「自分の文化に着目している暇がなかった。」などをあげている。一方、韓国側は自分の文化に対し「自分の国に対する考えが変わるには時間が短かった」、相手の文化に対し「自分の文化を感じることは多かった。しかし（中略）日本の文化に接する機会はほとんどなかった。」などの記述がみられた。文面通り、気づきや発見がなされなかったと受け取ることもできるが、文化の定義が各々異なるため質問項目の曖昧性の問題も指摘され、検討が必要である。

【参考文献】

石井敏也・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編（1997）『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書

李徳奉（2003）「異文化理解教育の範疇と方向」『接触場面と日本語教育―ネウストプニーのインパクト―』明治書院

遠藤克弥『国際化理解と教育　新しい国際理解論の構築をめざして』川島書店

お茶の水大学国際教育センター・文教育学部グローバル文化学環（2006，2007，2008）『グローバル時代における日韓の重要性　第2，3，4回日韓大学生国際交流セミナー報告書』

お茶の水大学国際教育センター・文教育学部グローバル文化学環（2009近日刊行予定）『グローバル時代における日韓の重要性　第5回日韓大学生国際交流セミナー報告書』

森山新「総評 日韓の真の対話と交流への重要な新たな一歩」/申恩淨「第5回韓日大学生交流セミナー日程表」

加賀美常美代（2006）「教育的介入は多文化理解態度にどんな影響があるか―シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合―」『異文化間教育』26、異文化間教育学会 アカデミア出版、pp.76-91

クラムシュ・クレア（2006）「異文化リテラシーとコミュニケーション能力」『変貌する言語教育―多言語・多文化社会のリテラシーズとは何か』藤原出版

小山慎治・川島浩美（2001）「コミュニケーション能力の評価―評価者と尺度の文化的要因に関する実態調査」『神田外語大学異文化コミュニケーション研究所　異文化コミュニケーション研究』13、pp15-29

安場淳・池上摩希子・佐藤恵美子（1998）『体験学習法の試み』凡人社

津村俊充・石田裕久編（2005）『ファシリテーター・トレーニング自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ』ナカニシヤ出版

津村俊充・山口真人編（2005）『人間関係トレーニング第2版　私を育てる教育への人間学的アプローチ』ナカニシヤ出版

西田ひろ子編（2000）『異文化間コミュニケーション入門』創元社

星野欣生（2002）『人間関係づくりトレーニング』金子書房

牧野真理子（2002）『異文化ストレスと心身医療』新興医学出版社

宮本律子・松岡洋子（2000）「多文化コミュニケーション能力尺度作成の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』22、pp.99-106

八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子（1998）『異文化トレーニング―ボーダレス社会を生きる―』三修社

山岸みどり（1997）「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』11、異文化間教育学会 アカデミア出版会　pp.37-51

にしおか　まいこ／同徳女子大学校大学院　日語日文学科　修士課程2年